地方における印刷文化の開花

京文化、上方文化、江戸文化という名に示されるように、日本の歴史において文化の中心地となったのは、総じて、西では京都、大坂(大阪)、そして東では江戸(東京)であったといえるでしょう。それは、印刷文化についても同じことがいえそうです。

しかし、これら文化の中心地である都市から、地方へと目を転じてみると、さまざまな印刷文化が誕生し、独自の文化が築かれていたことを知ることができます。今号では、こうした地方において開花した印刷文化の一例を紹介します。

文化の地方伝播と大内家の開版事業

室町幕府が開かれた京都は、文化の中心地でもありましたが、応仁・文明の乱(1464～1477年)の大火に見舞われると、ほとんどが廃墟と化しました。この戦火を逃れるため、文化の担い手であった貴族や学僧などの文化人が地方へと分散したことにより、京の室町文化は各地へと伝わることとなりました。印刷文化もそのひとつで、地方の豪族、寺院、有力者の手により開版事業が行われるようになりました。

その代表的な例が、大内氏の本拠地であった周防の山口です。大内氏が貴族や文化人を厚遇し、また来往する学僧を庇護したことにより、山口は地方文化の中心地へと成長しました。こうした環境のなかで、五山版※系の古版本の印刷事業が行われたのです。すでに応永33(1426)年に仏典である『般若理趣経』千巻が印刷されていましたが、大内義弘の代に至って開版事業は盛大となり、明応2(1493)年に『聚分韻略』が、続いて明応8(1499)年には『論語集解』がそれぞれ開版されました。これらは大内版と呼ばれ、その後も『聚分韻略』が再版されるなど、天文20(1552)年に大内氏が滅亡するまで印刷事業は続けられました。

『歴代序略』(財団法人東洋文庫蔵)

駿河版の開版と家康の印刷・出版事業

このような京文化の伝播を受けての開版事業は、薩摩や日向、美濃、駿河の駿府(現在の静岡市)においても行われています。中でも、室町幕府将軍の足利氏からの分かれである今川氏の領国駿府には、周防山口同様、京の戦火を避けて多くの公家が訪れることとなり、また今川義元の母が公家の出だったことから一流の文化人が滞在していました。こうしてさながら小京都と化した駿府では、能や和歌、香道、茶などさまざまな京文化が伝えられ、今川文化が築かれたのです。また、これらの公家文化だけでなく、五山文化も伝えられ今川文化の柱をなしていましたが、この五山文化の影響を受け、開版事業が行われました。『歴代序略』ならびに『聚分韻略』の刊行です。中国の歴史書である『歴代序略』は臨済寺において、同寺の住持であり、今川義元の軍師でもあった雪斎の手によって印刷されました。一方『聚分韻略』は、前述の周防山口をはじめ、薩摩や日向においても刊行されましたが、ここ駿府でも、雪斎の弟である建乗が、善得寺において開版に着手しました。ともに天文23(1554)年に刊行され駿河版と称されましたが、さらに駿府では、印刷史に大きな足跡を残すこととなる一大印刷事業が行われました。それが、徳川家康による駿河版銅活字の鋳造と、銅活字を用いた書物の刊行です。実は家康は、少年期を今川家で人質として過ごしており、その間、雪斎より学問を学んでいました。『歴代序略』を開版した雪斎が、家康に印刷の知識について教えていたことは十分考えられ、家康も印刷の持つ重要性を学び、興味と関心を深めていたと思われるのです。こうした影響を受けた家康がその後、大御所として駿府に引退すると、朝鮮伝来の銅活字をもとに、日本人の手による初の銅活字を鋳造し、『大蔵一覧集』と『群書治要』の2冊の書物を印刷するに至ったのです。

駿河版銅活字

長崎版画

長崎版画と売薬版画

天正少年遣欧使節を契機に西洋式活版印刷術が導入され、布教を目的にキリシタン版が印刷された長崎では、西洋の影響を受ける形で印刷文化が開花しました。その後いわゆる「鎖国」時代となっても、ヨーロッパ世界に開かれた唯一の窓口となり、異国の人・物・情報が流入する都市として発展しました。その結果、長崎には、全国各地から人々が訪れるようになりますが、こうした人々を対象に長崎版画と呼ばれるものが印刷され、土産として売られていました。長崎版画とは、オランダ人やオランダ船、オランダ舶来の象や駱駝、出島、唐人、唐船といった長崎に関連した風物を画題とした版画で、豊島屋、文錦堂、大和屋などさまざまな版元が長崎の地に店舗を構え、制作・販売していました。

長崎を訪れた人々の手によって持ち帰られたことにより、長崎版画に描かれた異国の情報が各地へと伝えられたことは想像に難くありません。その点からも長崎版画は、ニュース性をも兼ね備えた印刷物であったといえるでしょう。

また、長崎版画と同じく地方において制作された版画に、越中(富山)の売薬版画があります。文字通り、富山の薬売り商人が全国の得意先へと販売にまわる際にお土産として配った版画で、江戸時代から明治時代にかけて盛んに用いられました。

印刷は、彫り、摺りともに一貫して富山地方で行われましたが、錦絵に比べると摺りが粗雑であり、安価に仕立てられています。これは、売薬版画があくまで無料で配布される、いわゆるサービス品であったためですが、護符や暦など実用性を兼ね備えたものや、子どもの遊びに利用できるものがあり、子どもから大人まで喜ばれました。

地方において開花した印刷文化は、今回紹介した以外にもさまざまなものがあげられます。そして、これらの印刷文化が、その舞台となった地域の文化や産業を発展させるとともに、今日に至る印刷文化を支えてきたことは疑いのない事実であるといえるでしょう。

※五山版…鎌倉時代から室町時代にかけて、五山(臨済宗の5つの大寺院。鎌倉の建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺、京都の天龍寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺の十寺の上に南禅寺を置き、これらを十一寺五山と称した)をはじめとする禅寺で出版された宋・元・明および朝鮮刊本の復刻本。

文:緒方宏大(印刷博物館学芸員)

● 参考文献 ●

・根塚伊三松『売薬版画 おまけ絵紙の魅力』、巧玄出版、1979年
・小和田哲夫監修『今川時代とその文化 消えた230年を追う』、静岡県文化財団、1994年
・中根勝『日本印刷技術史』、八木書店、1999年
・『日本古典籍書誌学辞典』、岩波書店、1999年
・小和田哲男「今川文化の中で育った家康」『江戸時代の印刷文化―家康は活字人間だった!!』展示図録、印刷博物館、2000年
・岩下哲典「〈日本が描いた異国〉を知る手掛かり―江戸から明治の長崎・横浜・東京の『土産版画』を読む―」『開国150年記念展 西洋が伝えた日本／日本が描いた異国』展示図録、印刷博物館、2004年

売薬版画